

本部企画

武道の国際的普及をめぐって

— 武道に期待されているもの —

パネリスト 寒川 恒夫（スポーツ人類学会会長、早稲田大学）
金子 明友（スポーツ運動学会、筑波大学名誉教授）

司 会 湯浅 晃（天理大学）
桑森 真介（明治大学）

日 時：平成22年9月2日（木）

15：00～17：00

会 場：メディア棟 M301

趣 旨

武道の国際的普及は、個別の種目によってなされている。その普及状況や課題については、これまでに本学会のシンポジウムで取り上げられてきた。各種目の専門家や外国人実践者からの報告受け、それぞれの種目固有の課題が浮き彫りになりつつある。しかしながら、各種目に共通する「武道の特性」について言及するまでには至っていない。また、一昨年、昨年と中学校武道必修化問題に取り組んできたが、ここでも「我が国固有の文化」、「武道の伝統的な考え方」など「武道の特性」についてどのように実践していけばよいのか、種目ごとに取り上げられたものの、武道総体としての「特性」についての論議は先送りされた。

以上、過去に実施された学会シンポジウムのこれまでの歩みを踏まえ、本年度は、武道総体としての「特性」を示すことが本学会に課せられ緊急の課題であると言う認識に立ち、「武道に期待されているもの」の何であるかを他学会の立場から示していただくこととした。今回は、スポーツ史及びスポーツ人類学の観点から早稲田大学教授寒川恒夫氏、スポーツ運動学の「動感身体・カン・コツ」の観点から筑波大学名誉教授金子明友氏のお二人に、それぞれのご専門の立場から話題提供をしていただき、日本という土壌で培われてきた武道文化の今日的意義について議論を深めていきたい。

武道の国際化をめぐる

寒川 恒夫（早稲田大学）

武道の国際化は武道がグローバルにおこなわれることを意味するが、ごくごくふつうには、武道の国際競技化と理解されている。日本生まれの武道が日本とは文化環境を異にする諸外国の人々のなかで、日本人をも含めて、誰が世界一であるかを競うようになることを言うのである。そして、そのためには、グローバルに通用する組織と競技規則、それにそもそも武道実施を社会的に（この場合は国際社会的に）保証する精神文化とが備わっていなければならない。

武道の国際化をめぐる近年生起している問題は、どうも後者の精神文化に収斂しそうである。メイド・イン・ジャパンの精神文化がグローバルに受け入れられるかが、問われているのである。

武道の国際化とはいうものの、しかし現実に問題になっているのは、武道という総称概念（類概念）の国際化ではなく、柔道なり剣道なりの、つまり種目の国際化である。武道は、これに含まれる種目が持ついわば種概念としての精神文化とは別に、それらを武道として認識するための類概念としての精神文化を必要とする。それは、弓道にも空手道にも、合気道またナギナタ、相撲、さらには銃剣道や少林寺拳法、古武道までを視野に入れるものであり、そのすぐれた一つの表現を我々は1987年に制定された「武道憲章」に見ている。そこには、前文で武道が日本文化であることが「武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。」と詠われ、第6条「普及に当たっては、伝統的な武道の特性を生かし、国際的視野に立って指導の充実と研究の促進を図るとともに武道の発展に努める。」と国際化への決意をもって結ばれている。

武道のこうした理解は実は20世紀に入ってからのものであり、それは明治という日本の近代化と無縁ではなかった。いな、近代というグローバル化のなかで日本人のアイデンティティの変容・消失が危惧されるなかから、そのカウンターカルチャーとして創られたのが、今日いう武道であることが、これまでの研究によって明かされている。問題は、憲章にもられた「日本の伝統文化」「武道の真髄」「日本人の人格形成」、これらの中身をどのように理解するかにある。国際競技を束ねるIOCが掲げる精神文化とどのように折り合いをつけるかも問われよう。

一国の文化がグローバル化するとき、その文化は、伝わった先の社会の文化にフィットするように変容されて受け入れられていくのがふつうである。このことは、国際化が痛みをともなうことを示唆している。

寒川恒夫（そうがわ つねお）氏

1947年生まれ。筑波大学大学院体育科学研究科博士課程修了、学術博士。
早稲田大学教授。

日本学術会議連携会員。アジアスポーツ人類学会会長。

専門はスポーツ人類学、スポーツ文化論。

近年、日本の民族スポーツとしての武道に魅了されている。

武道と運動感覚

金子明友

【I】 武道と運動学の関わり

武道としての身体運動は〈芸^{わざ}〉の生成と消滅ないしその伝承に関心がもたれるとき、はじめて身体発生論的運動学が主題化される。そこで意味される身体はフッサールの感覚論的身体学(Hua. V. S. 7ff.)に関わる運動感覚身体、つまり〈動感身体〉が意味され、その生成消滅ないし伝承を動機づける意味核をなす。それ故に武道の身体運動といっても、そのメカニズムの精密科学的分析(バイオメカニクス、サイバネティクス、生理学的運動科学)は本論の射程から外される。

【II】 運動感覚の反論理性

価値と意味に関わる身体運動は知覚の反論理性原理(Weizsäcker, V.)に支配される。レールの幅はその奥行き知覚で数学的平行概念が破られると考える人はいない。同時にその平行線が収斂して見えるのを否定する人もいない。そこで運動感覚という現象を厳密に分析するにはその内在矛盾性を起点にせざるをえない。〈自我-運動〉はわが身にありありと感じとれる内在知覚をもち、感覚は自らを感じとる内在経験と同義である。だから身体運動は本原性を意味核としたコツ／カンの志向体験である。コツ／カンの一つの動感意識の反転化する両面であり、カンが表に出るときには裏にコツが息づいている。

【III】 運動感覚の直接経験

運動感覚は動く主体に直接に経験される。それは私の身体の絶対ゼロ点から固有の体験時空系を構成する。この動感化された原点から遠近感や気配感などの直接経験が生み出され、そこに動感化された諸カテゴリーが定立される。この動感能力の発生は主客未分の純粹経験を起点としている。その生成も消滅も常に秘密であり、偶発的である。その偶発性の直接経験に身体発生、つまり動感身体知の発生分析論の起点がおかれる。

【IV】 芸道としての武道

身体発生論的視座に立つと、日本固有の武道はわが国の中世に始まる芸道の一領域と見ることができる。わが国の芸道思想は古代中国に源流をもつとしても、その至芸の極致に向けて無限の努力志向性を内在させている武道文化は西欧に発する合目的な思考枠組みを脱した身体習練の固有な思想をもっている。武道のもつ〈冴え〉の美意識は身体教育ないし競技の基柢に据えられる重大事といえる。武道に潜む目的論的無限性はわが国の誇るべき運動文化の一つとして国際的に大きく発展することが期待される。

金子明友（かねこ あきとも）氏

筑波大学名誉教授
元日本女子体育大学学長
国際体操連盟名誉メンバー

主たる著書：

『スポーツ運動学-身体知の分析論』、2009年、明和出版

『身体知の構造』、2007年、明和出版

『身体知の形成[上]-運動分析論講義・基礎編-』、『身体知の形成[下]-
運動分析論講義・方法編-』、2005年、明和出版

『わざの伝承』、2002年、明和出版

マイネル遺稿『動きの感性学』（編訳）、1998年、大修館書店

教師のための器械運動指導法シリーズ『マット運動』『跳び箱・平均台
運動』

『鉄棒運動』、1982～1984年、大修館書店

『マイネル・スポーツ運動学』（訳）1981年、大修館書店

『体操競技のコーチング』1974年、大修館書店